

令和5年度

劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業

(地域の中核劇場・音楽堂等活性化)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人横浜市芸術文化振興財団	
施 設 名	横浜能楽堂	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	21,374	(千円)
	公 演 事 業	18,535 (千円)
	人 材 養 成 事 業	0 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	2,839 (千円)

1. 事業概要

(1) 令和5年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数(人)	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	企画公演「この人 この一曲」	令和5年4月30日(日) ～令和5年7月16日(日)	能「大原御幸」本田光洋 能「二人静」佐々木多門 能「松山天狗」片山九郎右衛門	目標値	1,014
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	1,347
2	開館28年謝恩 横浜能楽堂「中締め」特別公演 第1回 「芝祐靖の遺産」	令和5年8月5日(土)	「呼韓邪単于-王昭君悲話-」 「復元正倉院楽器のための敦煌琵琶譜による音楽」演奏：伶楽舎	目標値	314
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	356
3	開館28年謝恩 横浜能楽堂「中締め」特別公演 第2回 「琉球芸能600年」	令和5年9月9日(土)	組踊「萬歳敵討」、喜劇「棒しばり」、 創作舞踊「蜻蛉羽」ほか	目標値	340
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	462
4	開館28年謝恩 横浜能楽堂「中締め」特別公演 第3回 「所縁の日本舞踊」	令和5年10月29日(日)	箏曲「熊野」、常磐津「三つ面子守」、 常磐津・長唄「身替座禅」、長唄「綱館」	目標値	314
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	398
5	開館28年謝恩 横浜能楽堂「中締め」特別公演 第4回 お水取りの能	令和5年11月26日(日)	狂言「仁王」山本則重 声明入り・蠟燭灯りによる 能「青衣女人」香川靖嗣	目標値	340
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	456
6	開館28年謝恩 横浜能楽堂「中締め」特別公演 第5回 「珠玉の能・狂言」	令和5年12月2日(土)	狂言「寝音曲」山本則重 能「鷺」大槻文藏	目標値	340
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	460
7	第70回 横浜能	令和5年6月18日(日)	連吟「高砂」、仕舞「小袖曾我」 一調「女郎花」、舞囃子「胡蝶」、 狂言「福の神」、能「花筐」	目標値	340
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	458

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和5年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数(人)	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	横浜能楽堂次世代育成プロジェクト①「横浜こども狂言堂」	令和5年7月30日 (日)	狂言「柿山伏」山本則秀、 狂言「清水」山本則重、 お話 山本東次郎	目標値	340
		横浜能楽堂 本舞台		実績値	429
2	横浜能楽堂次世代育成プロジェクト②「こども狂言ワークショップ」	令和5年7月31日 (月)～令和5年12月24日 (日)	こども向け狂言ワークショップと 発表会 講師：山本則重、山本則秀	目標値	20 (発表会 来場者： 100)
		横浜能楽堂 本舞台・ 第二舞台		実績値	88
3	横浜能楽次世代育成プロジェクト③「教育プラットフォーム」と「先生のための狂言講座」	令和5年7月30日 (日)～ 令和6年1月23日 (火)	市内小学校へのアウトリーチ事業 教職員を対象とした狂言の講座。	目標値	教育プラットフォーム：横 浜市内小学校5校 程度(実施級の児 童数)、 講座：80
		横浜能楽堂 本舞台、 横浜市立深谷小学校 ほか		実績値	457
4	伝統文化一日体験オープンデー	令和5年7月29日 (土)	仕舞鑑賞・見学会、雅楽鑑賞、 小鼓体験、太鼓体験、 おはなし会、獅子舞など	目標値	420
		横浜能楽堂 全館		実績値	1156
5	和のワークショップ	令和5年5月27日 (土)～ 令和5年10月22日 (日)	能楽師が案内する見学とワークショップ 能楽入門講座 など	目標値	176
		横浜能楽堂 本舞台・ 楽屋		実績値	383
6	横浜能楽堂施設見学会	令和5年4月13日 (木)～ 令和5年12月27日 (水)	定期見学日、夏の施設見学日、 特別施設見学日など	目標値	464
		横浜能楽堂 本舞台・ 楽屋ほか		実績値	1403

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>ミッション（社会的役割等）・ビジョンや地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>横浜能楽堂を管理・運営する横浜市芸術文化振興財団は、「2030年へ向け、多様性に満ち、創造性あふれる横浜」を目指して中期経営計画を策定し、5つの事業方針を掲げています。</p> <p>【参考】公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 中期経営計画 2022-2025 https://p.yaf.jp.org/wp-content/uploads/2023/03/yaf2022-2025.pdf</p> <p>また、横浜市は横浜能楽堂に求める役割として6つの使命を挙げています。</p> <p>【参考】 横浜市能楽堂（横浜能楽堂）指定管理者業務の基準 https://www.city.yokohama.lg.jp/business/kyoso/public-facility/kaku-katsuyou/bunka/senteihyoka/nougakusentei/nougaku.files/0057_20210218.pdf</p> <p>横浜能楽堂では、これらを念頭に「古典芸能で日本の伝統文化に誇りを持つ現代に生きる力を育む」というミッションを掲げています。ミッションを達成するため、市民に横浜能楽堂および古典芸能に親しんでもらうための活動、また市内に止まらず国内外に横浜能楽堂の魅力を発信していけるようなユニークな活動を行っています。令和5年度は、令和6年からの大規模改修工事による長期休館を前に、開館からこれまでの事業を総括する「中締め」特別公演（公演2～6）、企画公演「この人 この一曲」（公演1）を核とし、他ジャンルとのコラボレーションによる古典芸能の新たな魅力の発信（公演2、5）、幅広い市民に能・狂言や能楽堂の魅力を知らせてもらえるよう、「第70回 横浜能」（公演7）、「横浜狂言堂」（助成対象外）や、様々な講座・ワークショップや施設見学会（普及啓発5.6）、次世代を担うこどもたちに向けた、公演・ワークショップ（普及啓発1、2、3）、などのプログラムをバランスよく組み立て、全ての事業を予定通りに実施しました。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>【文化的意義】</p> <p>「中締め」特別公演（公演2～6）では、能・狂言をはじめ、雅楽、琉球芸能、日本舞踊など多様な古典芸能ジャンルを取り上げました。5公演平均の入場率は85%を超え、来場者から「日本舞踊を初めて見たが、また見てみたいと思った」との声が聞かれるなど、古典芸能の魅力を多くの人に発信した公演となりました。</p> <p>また、年間を通じて横浜市在住やゆかりの出演者を多く取り上げました。「中締め」特別公演第2回（公演3）出演の名嘉ヨシ子氏、「第70回 横浜能」（公演7）出演の大坪喜美雄氏は、本公演の出演により、令和5年度の横浜文化賞に選定され、地域文化・芸術の水準向上にも寄与しました。</p> <p>【社会的意義】</p> <p>「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」や「先生のための狂言講座」など教育現場のニーズに応えた事業や「こども狂言堂」「こども狂言ワークショップ」など次世代を担うこどもたちに向けた事業を実施しました。また、「伝統文化一日体験オープンデー」の開催、12月の特別施設見学会では手話通訳を導入するなど、多様な市民が伝統文化に気軽に触れる機会を創出しました。</p> <p>【経済的意義】</p> <p>企画公演「この人 この一曲」（公演1）、「中締め」特別公演（公演2～6）では、企画性、創造性の高い事業を実施し、8公演中6公演でチケットが完売し、目標を超える入場料収入を得ることができました。来場者は、市民だけでなく、県外からの来場者も多く、地域経済の活性化にも寄与しました。また能の上演には、多くの出演者を必要とするため、多くの経費を要しますが、助成により、能楽にあまりふれたことのない観客層も来場できるような安価な入場料で、公演鑑賞の機会を提供することができています。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

公演事業

【目標 1】 芸術性の高い事業、企画性の高い事業実施による古典芸能の振興と発展に寄与

指標 事業番号 1、5、6、7 の券売率を 70%以上

(実績) 事業番号 1、5、6 : 100% 事業番号 7 : 98.9% ⇒達成

指標 事業番号 2~6 来場者アンケートで、来場理由に「企画内容に興味」と回答した人 68%以上。

(実績) 事業番号 2~6 公演平均で 75.6% ⇒達成

【目標 2】 古典芸能の観客層拡大

指標 事業番号 2、4 について、初心者向けの解説コンテンツを SNS で発信。imp 数を各 11000 回以上。

(実績) 事業番号 2 : 90110 回、 事業番号 4 : 15751 回 ⇒達成

【目標 3】 横浜の地域の特性を生かした広報の実施

指標 事業番号 4、7 について地域コミュニティを利用した広報活動 2 回以上実施。

(実績) 事業番号 4 : 1 回 ⇒未達成、 事業番号 7 : 2 回 ⇒達成

★目標は概ね達成することができました。令和 5 年度事業の核である「中締め」特別公演（事業番号 2~6）では、企画性の高い事業を多くの人に鑑賞していただくことで、古典芸能の振興につながりました。また、YouTube を通じて公演内容の解説や出演者インタビューなどの動画を配信。雅楽の復原楽器の解説動画は特に視聴者が多く、楽器を通じて公演への理解を深めてもらうことができました。

普及啓発事業

【目標 1】 観客の裾野の拡大

【指標】 初来館者が占める割合

事業番号	目標	実績	達成・未達成
事業番号 1	50%以上	81%	達成
事業番号 3	80%以上	74%	未達成
事業番号 4	42%以上	55%	達成
事業番号 5	37%以上	34%	未達成

【目標 2】

【指標】 事業番号 1 子どもの入場率 45%以上

(実績) 38.2% ⇒未達成

【目標 3】 地域や近隣施設との連携

【指標】 事業番号 4、6 について地域の団体や近隣施設と連携した広報を各 1 件以上実施します。

(実績) 事業番号 4 : 8 件、事業番号 6 : 10 件 ⇒達成

★初来館者については、目標を僅かに下回り、未達成の事業もありますが、事業番号 1 のように目標を大幅に上回った事業もあり、結果としてすそ野拡大を達成することができました。目標 2 については、指標となる子どもの入場率 45%以上は達成できませんでした。こどもの来場者数は昨年と同等でしたが、大人の来場者が昨年よりも増えたことが理由として挙げられます。目標 3 については、近隣の公共施設や企業、町内会などと連携して広報を行い、地域との結びつきを強め、地元住民の来館を促し、施設や古典芸能への認知度向上に寄与しました。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

令和6年1月から大規模改修工事に入ることもあり、令和5年度の事業は、4月から12月の期間で開催することになりましたが、公演、講座などを概ね計画通り開催することが出来ました。「中締め」特別公演（公演2～6）では、能・狂言のほか、雅楽、琉球芸能、日本舞踊、といった古典芸能を横浜能楽堂ゆかりの演者により5回シリーズで開催しました。他ジャンルとのコラボレーションや、能舞台の魅力を活かすような演出など、毎回工夫を凝らして上演。5回全ての公演を鑑賞されたお客様もいて、古典芸能の幅広い魅力を感じていただくことが出来ました。

横浜能楽堂施設見学会（普及啓発6）については、毎月第2木曜日開催の定期見学会に加えて、休日や午前中、夜間に開催する特別施設見学会も実施し、多くの方にご参加いただくことが出来ました。なお、要望書では定期見学会を7回以上開催としていましたが、6回開催となり、その代替として近隣施設連携事業として特別見学会（2回）を開催しました。

こども狂言ワークショップ卒業編（普及啓発2）、「教育プラットフォーム」（普及啓発3）、和のワークショップ（普及啓発5）については、要望書提出の段階で日程が未定のものがありましたが、例年年度が始まってから調整をしているものであり、予定通りに日程調整が進み、実施となりました。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

要望時（A）と決算時（B）における助成対象経費の比率は以下の通りです。

公演事業

事業番号	1	2	3	4	5	6	7
	86.19%	76.03%	77.35%	98.63%	89.72%	86.57%	91.82%

普及啓発事業

事業番号	1	2	3	4	5	6
	96.03%	98.98%	90.20%	74.13%	106.82%	102.73%

要望時と決算時で大きく乖離（80%未満または120%以上）事業は3件。公演2では、ダンス出演者が当初の予定よりも減ったこと、公演3では、沖縄出演者の旅費を旅行会社のツアーを組むことにより大幅に圧縮することが出来たことなどが理由として挙げられます。

古典芸能の上演には、多くの出演者を必要とするため、経費もかさみがちですが、助成を得ることにより、に入場料を低めに設定することが出来ました。結果、公演事業については全ての公演で、目標を超える集客があり、多くの方に古典芸能の魅力を発信することが出来ました。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

【劇場・音楽堂等の資源】

◆芸術監督 中村雅之

横浜能楽堂では、平成 31 年より中村雅之が芸術監督に就任しています。幅広い知識や海外の芸術団体とのネットワークを活かし、横浜能楽堂での各公演のプロデュース、講演活動の他、吉祥寺薪能など外部での解説、明治大学兼任講師、にっぽん文楽プロデューサーなどを勤め、「教養としての能楽史」（ちくま新書刊）、和菓子の芸心（東京新聞にて月 1 回連載）などの執筆活動を行っています。

令和 6 年度は、公演 2～6「中締め」特別公演のプロデュースを行いました。本公演は大規模改修による長期休館に入る前に、これまでの横浜能楽堂の取り組みを総括し、能・狂言をはじめ、横浜能楽堂で上演してきた様々な古典芸能を、ゆかりの演者により 5 回シリーズで開催したものです。5 公演のうち 3 公演でチケットが完売し、アンケート調査での満足度は 4.72 点（5 点満点）と高いものとなりました。参加者からは「雅楽と歌やダンスのコラボは初めてでしたがすばらしかったです。このような企画があったらまた来たいです」「横浜能楽堂が掲げてきた『敷居を低く』のコンセプトのおかげで、能・狂言に入りやすくなり、いつのまにか敷居を感じなくなりました。しばらく横浜能楽堂で能・狂言が観られないのが残念です。リニューアル心待ちにしています」など好意的な意見が多く聞かれました。また、普及啓発 5「和のワークショップ」のメニューのうち、「芸術監督による能楽入門講座」の講師を務め、参加者からは「初歩の初歩からのお話が自分にあっていた。西洋や他の芸能との違いが分かって面白く楽しくきけました」などの意見が聞かれました。

◆事業担当者

芸術監督のもと、3 名の事業担当が公演の制作を行っており、内 2 名は専門的な知識を持ったプロデューサーとして、公演企画立案にも携わっています。令和 5 年度は、公演 1 企画公演「この人 この一曲」のプロデュースを行いました。本公演では、能装束研究家や能楽研究者など能楽関係者が独自の視点から選んだ曲を上演することで、装束、演出など様々な鑑賞ポイントがあることを示し、鑑賞初心者には能を親しみやすくし、愛好者にはより深く能を知る機会を提供しました。入場率は 3 公演平均で 92.4%、4 割近い方がセット券を購入するなど企画に対する高い関心を感じられました。第 3 回公演では、上演機会の少ない能「松山天狗」を取り上げたこともあり、字幕解説を 2 か国語で配信。約 55%の人が利用し、多くの方に作品の内容をより深く理解していただくことが出来ました。またプロデューサーは、神奈川大学や横浜国立大学の留学生向けの能楽講座（助成対象外）、のコーディネート・講師を務め、地域と連携して能・狂言の振興を行いました。

◆横浜能楽堂本舞台

横浜能楽堂の本舞台は明治 8 年に東京上根岸の前田齊泰邸に建てられた、現存する関東最古の能舞台で、横浜市の有形文化財にも指定されています。その魅力を最大限に活用すべく、毎月施設見学会をはじめ、「能楽師が案内する横浜能楽堂見学とワークショップ」など、これまで能楽堂に足を運んだことが無い層にも興味を持ってもらえるような初心者向けワークショップと舞台見学を合わせた事業を開催し、市民の皆さまに横浜能楽堂の舞台の歴史や能舞台の魅力を伝える活動を行いました。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

◆公演 2～6 「中締め」特別公演

長期休館を迎えるにあたり、これまでの横浜能楽堂の取り組みを総括し、能・狂言をはじめ、横浜能楽堂で上演してきた様々な古典芸能を、ゆかりの演者により5回シリーズで上演しました。

第1回では、横浜能楽堂にたびたび出演した雅楽演奏家・作曲家の芝祐靖が率いた伶楽舎が出演し、芝氏が復元した「敦煌琵琶譜による音楽」を横浜文化賞受賞者である中村恩恵構成・振付によるダンスとのコラボレーションで上演しました。参加者からは「それぞれの復元楽器が活躍するように作曲されていて良かった。小音の楽器が多かったが、この会場ではとても聞き取りやすかった。ダンスが音楽に合わせて構成されていたこともとても良く、大変すばらしい公演だった」などの感想が聞かれ、ダンス専門誌『ダンスマガジン（新書館発行）』12月号では、雅楽とダンスの融合を評価する評論が掲載されました。

第2回では、横浜ゆかりの芸能であり、横浜能楽堂でもたびたび取り上げてきた琉球芸能を上演。琉球王朝時代の古歌謡である王府おもろに始まり、現代に創作された舞踊まで、様々な作品で構成し、琉球芸能の600年の歴史を振り返る内容としました。チケットは早期に完売し、当日の入場率も95%を超えるなど公演に対する高い関心が寄せられ、『琉球新報』には公演後に「偽りない600年の看板」と題して公演内容や横浜能楽堂のこれまでの取り組みを評価する記事が掲載されました。

◆公演 7 第70回 横浜能

「横浜能」は、横浜市内の能楽実演・愛好者団体である横浜能楽連盟と連携して開催してきた催し。昭和28年に第1回が開催されて以来、地域に根差した能の公演を目指し、毎年、横浜ゆかりの能楽師の出演や、横浜ゆかりの演目を上演してきました。70回の節目の年を迎えた本年は、シテ方五流が勢ぞろいし、素謡や一調、仕舞など、さまざまな上演形式により、能の魅力を伝えるプログラムを実施しました。能は令和4年に重要無形文化財各個認定保持者に指定された、横浜市在住の大坪喜美雄による能「花筐」を上演。大坪氏は、本公演などの活動により、令和5年度の横浜文化賞を受賞しました。公演の入場率は94.2%と高い結果となり、来場者の74.4%が横浜市内からの来場となるなど、地域の文化芸術の振興と発展につながりました。

◆先生のための狂言講座

小学6年生国語の教科書（光村図書）に、狂言「柿山伏」が掲載されており、狂言の実演鑑賞、講座等のニーズが教育現場において高まっています。また、教科書の掲載写真は横浜能楽堂で撮影されていることもあり、市内の教員、教育関係者を対象とし、狂言「柿山伏」の実演鑑賞の後、教科書掲載の随筆「柿山伏について」の著者でもある人間国宝・山本東次郎が解説を行う、授業で子どもたちに狂言の面白さ、伝統文化の奥深さを伝えるためのヒントになるような講座を開催しました。

当日は70名の教職員の参加があり、教員たちの本講座へのニーズの高さがうかがえました。参加者からは「どのような思いで演じられているのかがとてもよく分かりました。今日の話を受けて、日本の文化を子どもたちに伝えたいという思いが高まりました」「山本東次郎さんの話がすばらしかった。狂言が『人間のおろかさも含めて尊い』ことを表現していることが、心に残り、考えさせられた」など好評な声が聞かれ、アンケート回答者の全員が講座の内容に満足したと回答しました。講座終了後には施設見学も開催し、教員たちに狂言の魅力や150年近い歴史を持つ能舞台が身近にあることを伝えることができました。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

【事業運営・人事戦略】

平成 31 年度より芸術監督のポストを設け、公演の芸術面・企画面での統括を専門的に行うことで、より質の高い公演実施が可能となっています。公演制作については、プロデューサー2 名を含む 3 名が担当し、企画立案から制作・広報など一貫して携わることで事業全体を円滑に実施しています。また来館促進担当は、来館促進を目的とした事業に力を入れ、施設見学会やワークショップ等、公演以外の能楽堂の魅力をアピールする事業を行っています。プロデューサーは横浜市芸術文化振興財団の実施する専門人材研修（令和 5 年度は 4 回実施）に企画から携わり、参加することで、施設間の連携強化やスキルアップを図っています。当財団においても人事異動はありますが、専門性を持つプロデューサーは平均 10 年、他の担当職員も 11 年横浜能楽堂で勤務しており、安定した運営が可能となっています。

全ての事業で来場者アンケートを実施、結果を全職員で共有することで、事業内容や施設運営の改善につなげているほか、毎月、事業担当者会議を行い、事業の進捗状況や、終了事業の課題・改善点を共有することで、事業の継続と発展に繋ぐシステムが構築されています。

【経営戦略】

横浜能楽堂の主な収益基盤は、「助成金収入」の他、「横浜市指定管理料収入」「自主事業収入（入場料収入等）」「施設利用料金収入」の 4 項目で全体の約 95%を構成します。自主事業については、約 90%を、「助成金収入」と「自主事業収入（入場料収入等）」で賄い、市費に依存せずとも実施できるようにしています。新規利用の促進や見学会など利用料金収入を得るための工夫や、ショップでの販売など、自主財源の確保に力を入れています。

【ネットワークの構築】

横浜能楽堂の建つ紅葉ヶ丘近辺は、神奈川県立音楽堂、神奈川県立図書館、神奈川県立青少年センター、横浜市民ギャラリーと 5 つの公共文化施設が集まる地域です。互いの施設の管理運営についての情報交換を平成 30 年度より始め、「紅葉ヶ丘まいらん」として 5 館連携イベントを開催してきました。令和 5 年度は月 1 回以上（16 回）、5 館の担当者が集まって会議を行い、令和 5 年 11 月 1 日～5 日には、横浜・紅葉ヶ丘まいらん連携事業「秋のスタンプリリー・見学会」として、5 館で様々な催しを開催。横浜能楽堂では、木の貯水槽が見られる特別な施設見学を実施しました。また、7 月 29 日に開催した「伝統文化一日体験オープンデー」では、横浜市民立中央図書館、伊勢山皇大神宮、神奈川県立音楽堂などの近隣の施設や団体と連携してプログラムを実施するなど、連携・協働を深めることで、より地域に密着した施設運営が可能となっています。

また、神奈川大学、横浜国立大学、横浜商科大学など横浜市内の大学と連携し、能・狂言に関する講座や施設見学会などのプログラムを提供し、若い世代や留学生など、普段、能・狂言に接する機会が少ない人たちにアプローチする機会を設けて、古典芸能の普及と新たな観客の創出につなげています。（助成対象外）

横浜能楽堂組織図

